

〈ヴェローナより愛をこめて〉

From Verona With Love

指揮とお話 アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, *conduct & talk*

コンサートマスター 三浦章宏

Akihiro Miura, *concertmaster*

ベルリオズ／劇的交響曲『ロメオとジュリエット』より
“マブの女王のスケルツォ” (約8分)

Berlioz: “Queen Mab Scherzo” from *Roméo and Juliette*, op.17 (ca. 8 min)

チャイコフスキー／幻想序曲『ロメオとジュリエット』 (約21分)

Tchaikovsky: *Overture Fantasy Romeo and Juliet* (ca. 21 min)

— 休憩 Intermision (約15分) —

ロータ／「ロメオとジュリエット」より“愛のテーマ” (約3分)

Nino Rota: *Love Theme from Romeo and Juliet* (ca. 3 min)

プロコフィエフ／バレエ組曲『ロメオとジュリエット』作品64より (約25分)

第2番より“モンタギュー家とキャピュレット家”、“少女ジュリエット”、
第1番より“仮面”、“バルコニーシーン”、“ティボルトの死”

Prokofiev: *Ballet Suite “Romeo and Juliet”, op.64 (excerpts)* (ca. 25 min)

“Montagues And Capulets”, “Juliet the Little Girl” from the 2nd Suite,
“Masks”, “Balcony Scene”, “Death of Tybalt” from the 1st Suite

第72回

休日の
午後の
コンサート

6/4(日) 14:00 開演 東京オペラシティ コンサートホール

Sun. June 4, 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan

イラスト：ハラダ チエ



出演者プロフィール

アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni

東京フィルハーモニー交響楽団 首席指揮者

1987年ヴェローナ生まれ。アンドレア・バッティストーニは国際的に頭角を現している若き才能であり、同世代の最も重要な指揮者の一人と評されている。2013年1月、ジェノヴァ・カルロ・フェリーチェ歌劇場首席客演指揮者、2016年10月、東京フィルハーモニー交響楽団首席指揮者に就任。東京フィルとの演奏会形式オペラ『トゥーランドット』(2015年)、『イリス(あやめ)』(2016年)で音楽界を牽引するスターとしての評価を確立。そのカリスマと繊細な音楽性でセンセーションを巻き起こしている。東京フィルとは日本コロムビア株式会社より5枚のCDをリリース。

これまでに、スカラ座、ヴェニス・フェニーチェ劇場、ベルリン・ドイツ・オペラ、スウェーデン王立歌劇場、アレーナ・ディ・ヴェローナ、バイエルン国立歌劇場等と共に、東京フィル、スカラ・フィル、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管、イスラエル・フィル等世界的に最も有名な楽団とも共演を重ねている。



©上野隆文

プログラム・ノート

解説=柴田克彦

今シーズンの「休日の午後のコンサート」の前半2回は、東京フィルの首席指揮者・バッティストーニがおくる「ヴェローナより愛をこめて」。イタリアの古都ヴェローナ生まれの若きマエストロが、地元を舞台にした悲恋の物語「ロメオとジュリエット」にまつわる音楽を、たっぷりと聴かせます。

「ロメオとジュリエット」は、イギリスの文豪シェイクスピアの戯曲で知られていますが、底本となった作品がイタリアを中心に古くから存在している普遍的なストーリー。これを題材にした音楽作品も数多く作られており、6月と9月の「休日の午後のコンサート」では、有名作はもちろん、比較的珍しい作品も紹介されます。1回目の今回はいわば“基本編”。「ロメジュリ」の代表作といえる名曲が4つ登場します。

「ロメオとジュリエット」といえば、対立する名家に生まれた2人の愛の悲劇。物語の中核が“争い”と“恋”ですから、これを描いた楽曲もまた、激しさと甘美さが交錯します。ここは、バッティストーニがシンパシーをこめて紡ぐ情感豊かな音楽に、心ゆくまで酔いしれましょう。

文豪シェイクスピアの傑作戯曲、
「ロメオとジュリエット」

今回演奏される4作は全て、イギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)が、1595年前後に書いた(とみられる)おなじみの戯曲に基づく音楽。まずは物語の大筋を記しておきましょう。

ヴェローナの町では、モンタギュー家とキャピュレット家が、長年争っていました。あるとき、モンタギュー家の一人息子ロメオは、友人たちと忍び込んだキャピュレット家のパーティーでジュリエットと出会い、2人は恋に落ちます。争い合う家の息子と娘の恋ですから表には出せず、2人は修道僧ロレンスのもとの密かに結婚しました。しかしその直後、ロメオは町中での争いに巻き込まれ、親友マーキュシオを殺された仕返しに、キャピュレット家のティボルトを殺してしまいます。そこでロメオは町

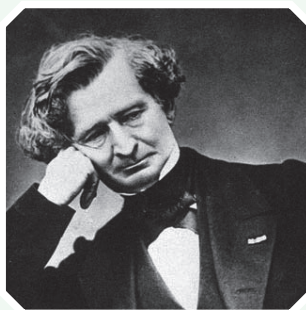


から追放され、ジュリエットは親戚パリスとの結婚を命じられます。ジュリエットに助けを求められたロレンスは、死んだように見せかける毒を彼女に飲ませて皆をあざむき、ロメオと一緒にになれるよう計画します。ところがその計画は追放されていたロメオに伝わらず、駆けつけた彼は彼女の死を悲しむあまり本物の毒を飲んで死に、目覚めたジュリエットもそれを知って後を追います。この悲劇によって、両家はついに仲直りするのです。

本作からは、映画やテレビドラマ、オペラ、バレエ、管弦楽曲など様々な作品が生み出されました。中でもクラシック音楽の代表作が、本日登場するベルリオーズ、チャイコフスキー、プロコフィエフの作品。あとはグノーのオペラもよく知られています。

なお日本において、元の戯曲や映画などは通常、英語読みの「ロミオ」と表記されますが、ラテン系の作品が多いクラシック音楽の場合は「ロメオ」の表記が慣例化しています。

フランスの革新家ベルリオーズの念願、大編成の劇的交響曲『ロメオとジュリエット』



幕開けは、フランスの革新的作曲家エクトール・ベルリオーズ(1803–1869)の劇的交響曲『ロメオとジュリエット』より“マブの女王のスケルツォ”。かの『幻想交響曲』初演の9年後に作曲されたユニークな交響曲中の1曲です。1827年パリで、イギリスから来たシェイクスピア劇団による「ロメオとジュリエット」を観たベルリオーズは、これに基づく交響曲を書く決意をしました。しかし実現したのはかなり後のこと。1838年に初演された

歌劇『バンヴェヌート・チェッリーニ』が大失敗に終わって気落ちし、経済的にも苦境に陥ったベルリオーズは、同年末の演奏会で『幻想交響曲』と交響曲『イタリアのハロルド』を指揮して成功を収めました。この公演を聴いていたのが、『イタリアのハロルド』を委嘱しながら演奏を拒否したヴァイオリンの鬼才パガニーニ。彼は、「あなたはベートーヴェンの真の後継者である」旨の言葉と共に、2万フランの大金をベルリオーズに贈りました。これで力を得たベルリオーズは、10年来の念願であった『ロメオとジュリエット』の作曲を開始。1839年9月に完成され、11月の初演でも大成功を収めました。

全体は、3人の独唱と合唱を伴う大編成の管弦楽によって各場面を描いた、全4部・約

1時間半の大作。通常の交響曲とは違った、オラトリオのような作品です。“マブの女王のスケルツォ”は、第4部の冒頭に演奏される管弦楽曲。“マブの女王”とは、夢の中に現れてその人の願いを叶えるという妖精の女王で、戯曲ではロメオの親友マーキュシオが語る挿入的なエピソードですが、精妙きわまりないこのスケルツォは、本作の代表曲となっています。曲は、プレスティッシモの主部に、アレグレットの中間部が挟まれる形。ヴァイオリンが弱音で奏する軽妙な主題が中心となり、木管や打楽器が巧みにブレンドされながら、妖精の国の雰囲気描かれます。

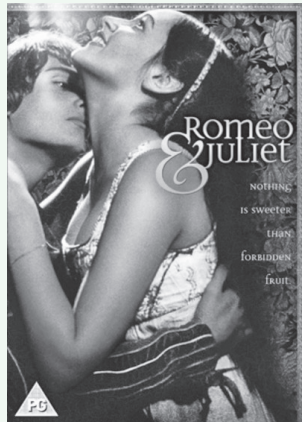
ロシア最大の巨匠チャイコフスキーの幻想序曲『ロメオとジュリエット』



次いでは、ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840–1893)の幻想序曲『ロメオとジュリエット』。ペテルブルグ音楽院を卒業し、モスクワ音楽院の教授になって3年後の1869年に書かれた、彼のレギュラー・レパートリーの中では最初期の作品です。ロシア国民楽派「5人組」のリーダー格で3歳年上の友人バラキレフの勧めによって作曲。「シェイクスピアによる幻想的序曲」として完成し、1870年に初演されました。しかし翌年の出版までに手を加え、1880年にはさらに改訂した第3稿を作成。翌1881年に改めて出版し、これが決定稿になりました。したがって現在耳にするのは、交響曲第4番やヴァイオリン協奏曲等を作曲後の習熟が反映された、初稿とはかなり違う音楽です。なおチャイコフスキーはその後、シェイクスピアの戯曲を題材にした、幻想曲『テンペスト』、幻想的序曲『ハムレット』も作曲しています。

この曲は、「幻想」のタイトルが示すように、物語そのものを追った音楽ではなく、物語の“イメージ”を音にした“音詩風の演奏会用序曲”です。まずはアンダンテ・ノン・タント、クワジ・モデラートの荘重な序奏部分が長く続きます。このコラール調の宗教的な音楽は、修道僧ロレンスの慈悲深さを表したもの。アレグロ・ジュストの主部に入ると、両家の対立を表わす激烈な主題を中心とした部分、ロメオとジュリエットのお互いの愛を表わす優美な主題を中心とした部分が続き、流れるような主題も加わります。やがて各主題が交錯しながら激しさを増し、劇的に展開。最後は純愛の果ての死を表す清らかな音楽となり、力強く終結します。

20世紀の作曲家が映画やバレエで描いた 「ロメオとジュリエット」の世界、ニーノ・ロータの映画音楽



フランコ・ゼフィレリ監督の映画「ロメオとジュリエット」(1968年)

後半最初は、20世紀イタリアの作曲家ニーノ・ロータ(1911-1979)の「**ロメオとジュリエット**」より“**愛のテーマ**”。これは映画のテーマ曲です。ロータは自身「クラシック音楽が本業」と語っていますが、圧倒的に映画音楽で有名。フェデリコ・フェリーニ監督の作品の大半の音楽を手がけたほか、「太陽がいっぱい」「ゴッドファーザー」やこの曲はスタンダード・ナンバーとして長く愛されています。本作は、1968年に公開された、フランコ・ゼフィレリ監督によるイギリス&イタリア合作映画で、原作の実年齢に近い10代のレナード・ホワイティングをロメオ、オリヴィア・ハッセーをジュリエットに起用し、大きな話題を集めました。“愛のテーマ”は、哀しくも美しい流麗な名曲。最近では、フィギュアスケートの羽生結弦が、2014年ソチ五輪で金メダルを獲った際のフリー演技の楽曲として注目を集めました。

20世紀ロシアの大家プロコフィエフの ロマンティシズム溢れるバレエ音楽より

後半の中心をなすのは、20世紀ロシアの大家**セルゲイ・プロコフィエフ**(1891-1953)の**バレエ組曲『ロメオとジュリエット』**のナンバー。ロシア革命の混乱を避けて1918年以降アメリカやフランス等に移り、モダンで実験的な音楽を創作していたプロコフィエフは、1934年ロシア=ソヴィエト連邦に帰国し、明快なロマンティシズム路線への転換を図りました。その最初期の最大の成果がバレエ『ロメオとジュリエット』です。本作は、レニングラードのキーロフ劇場(現・サンクトペテルブルグのマリインスキー劇場)の依頼により、1935年に作曲されました。しかし「踊りに不向き」等の批判により(しかも当初はハッピーエンドでした)、再三にわたって契約が破棄され、結局バレエ全曲の初演は1938年にチェ

コのブルノで行われました。ソ連での初演は1940年キーロフ劇場にて。その後は、チャイコフスキーの諸作と並ぶロシア・バレエの名曲として、広く親しまれています。

エピローグ付きの3幕のバレエは、概ね原作に沿った全52曲の大作ですが、プロコフィエフは上演のメドが立たないため、オーケストラ作品として先に発表することを思い立ちました。そこで各7曲から成る2つの組曲を作成。第1番が1936年11月にモスクワ、第2番が1937年4月にレニングラードで初演されました(その後第3番も作成)。組曲は、物語の進行に沿ったものではなく、コンサートでの効果を鑑みて再構成されたもの。各曲の内容も全曲版とは異なっています。

今回は、両組曲から5曲が演奏されます。

“**モンタギュー家とキャピュレット家**”(第2番 第1曲)は、第1幕第1場と第4場に基づく音楽。対立を表す激しく歪んだ響きに始まり、堂々とした旋律、ジュリエットが踊るフルートの美しい旋律が続きます。“**少女ジュリエット**”(第2番 第2曲)は、第1幕第2場、母からパリスの求婚を告げられたジュリエットが拒絶する場面の音楽。軽快なジュリエットの主題の変形を軸に進み、デリケートな緩徐部分へ移行します。“**仮面**”(第1番 第5曲)は、第1幕第3場、ロメオたちが仮面で変装してキャピュレット家の舞踏会に忍び込む場面の音楽。打楽器中心の導入から陽気な行進曲に移ります。“**バルコニーシーン(ロメオとジュリエット)**”(第1番 第6曲)は、第1幕第5場、舞踏会後にジュリエット家のバルコニーで2人が愛を交わす有名な場面の音楽。艶美で陶酔的な調べが続きます。“**ティボルトの死**”(第1番 第7曲)は、第2幕最後の激烈なナンバー。ロメオがティボルトに決闘を挑み(速い部分)、ティボルトが倒され(打撃音が続く部分)、死体が運ばれていきます(遅く激しい部分)。



しばた・かつひこ(音楽ライター)/音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。コンサートのプログラム、宣伝媒体、CD、雑誌等の原稿執筆およびプログラム等の編集業務のほか、「ラ・フォル・ジュルネ」での講演や一般の講座も行うなど、クラシック音楽を中心に幅広く活動中。

Follow UP!

世界文化遺産の街・ヴェローナに息づく物語の世界

ヴェローナは、北イタリアのヴェネト州の西部、ヴェネツィアとミラノの中間に位置する人口約27万の中都市です。先史時代からの歴史を誇り、中世の町並みが残る市街地は、全体がユネスコの世界文化遺産にも登録されています。中でも有名なのが、古代ローマ時代の円形競技場。熱心なクラシック・ファンには、この「アリーナ・ディ・ヴェローナ」で行われる夏の野外オペラ(ヴェルディの『アイダ』が看板演目)でおなじみでしょう。なおシェイクスピアは、もう1つこの町を舞台にした戯曲「ヴェローナの二紳士」も書いています。

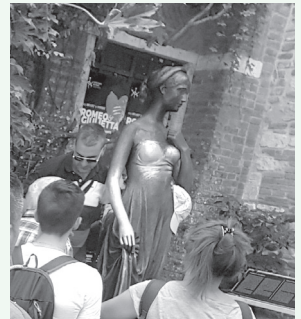
市内には、ジュリエットのモデルとなったカプレーティ家の娘の家が今も残されています。この「ジュリエッタの家」(イタリア語の女性名は、本来“ジュリエット”ではなく“ジュリエッタ”になります)は、町の観光名所。館内には、当時の家具や日用品が展示され、愛のシーンで名高いバルコニーや、右の胸、腕、指に触ると幸せになれるとの言い伝えがあるジュリエッタの像が人気を集めています。ちなみに像の一部は人々に触られ過ぎてテカテカです。



ヴェローナ市街の中心に残る「アリーナ・ディ・ヴェローナ」では野外オペラフェスティバルが行われる



2016年のヴェローナ野外音楽祭「アイダ」より ©FotoEnnevi



観光名所となっている「ジュリエッタの家」のジュリエット像